

「世界中の海を旅してわかった。僕は君なしでは生きていけない」

地中海沿岸の小さな町。町の娘マルティナと赴任してきた文学教師ウリセスは激しい恋に落ちる。幸せな日々を送る二人だったが、ウリセスはある日突然マルティナの前から姿を消す。数年後、再婚して平穏な生活を取り戻したマルティナの元に一本の電話が…。受話器から聞こえてきたのは彼の忘れられない声だった。海とオレンジ畑と二人の間で紡ぎ出される愛の詩を背景に、たとえ死んでも引き裂くことのできない運命を背負った恋人たちの姿を美しく官能的に描いた作品である。

愛と官能の巨匠、 ビガス・ルナ監督最新作

監督は、スペイン映画界の巨匠、ビガス・ルナ。 『ハモンハモン』(92 / 第49 回ヴェネチア国際映画祭銀獅子賞受賞)『おっぱいとお月さま』(93)などでもおなじみのポエティックな作風と独特のエロティシズム溢れる映像美は本作でも顕著に見られる。全編にちりばめられているギリシャ神話の一節は、ミステリアスかつエロティックな響きで、物語に厚みを与えているとともに、二人のドラマティックな運命を暗示させているかのようでもある。

女性の描き方のうまさに定評のある彼の作品では女性が愛の葛藤劇をもたらすこととともに、女性の備える母性とエロスが際立っていることも特徴。

スペイン映画界から新たなヒロイン 誕生―レオノル・ワトリング

『ハモンハモン』でペネロペ・クルスを見出したビガス・ルナが今回ヒロインに選んだのは、スペイン映画界期待の新星、レオノル・ワトリング。 黒い瞳、気品ある端正な顔立ちと肉感的なボディで大胆なラブ・シーンも厭わず熱演。抑えきれない愛に生きる女の激しさや苦悩を力強い演技で表現し、観る者を魅了する。既にペドロ・アルモドバル監督の次回作に主演が決定している。



原作はスペイン "アルファグアラ賞" 受賞作

『マルティナは海』は、「Sonde Mar」(マヌエル・ビセント著)を原作としている。「Sonde Mar」は、スペインでアルファグアラ賞を1999年に受賞、発売後わずか1ヶ月で10万冊以上の売上を記録するベスト・セラーとなった。「海の音」という意味のこの小説の映画化に際し、地中海を愛し、作品の舞台としてこだわり続けているビガス・ルナが監督を務めることになったのは幸運な出会いであったといえる。



躍進めざましいスペイン映画界

『オール・アバウト・マイ・マザー』 (98 / ベドロ・アルモドバル監督) が世界的大ヒットを果たしたことを皮切りに、『オーブン・ユア・アイズ』 (97)、『ミラクルベティント』 (98)、『バズル』 (99) などで、新感覚の若手監督たちが次々頭角を現し、盛り上がりを見せているスペイン映画界。最近では日本でも『蝶の舌』 (99) の大ヒットが記憶に新しい。ハリウッドを視野に入れた若手と、自分の生まれた土地と自然、そこで培われた文化や人間にこだわりつづけるベテラン。そのバランスの良い競合関係が、スペイン映画界の活性化に繋がっている。



2/2(ま)オレンジ香るロードショー!

特別鑑賞券¥1,500愛好評発売中 当日:一般1,800/学生[大·高]1,500/シニア1,000(概込) 劇場窓口にてお買い求めの方に、特製ポストカードをプレゼント(先着限定)



